



WHOが提唱するヘルシーエイジング概念に対応した 「機能的能力」尺度 (Nishioら2024) の妥当性を検証 ～3年後の別データでも指標としての安定性を確認～

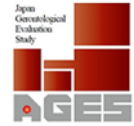
WHOの提唱するヘルシーエイジングの実現に向けて、Nishio (2024) らによって機能的能力を評価する尺度が開発されています。しかし、本尺度の妥当性を確認する上では、社会環境の変化を考慮して開発時と異なるデータを用いた検討が重要となります。本研究では、新たなデータセットに基づいて、機能的能力尺度の交差妥当性を検証しました。2019年度に日本老年学的評価研究機構が調査した139,792名のデータに基づき、分析を実施しました。その結果、開発時における3因子構造とは異なる6因子構造が最適と判断され、機能的能力尺度の交差妥当性が支持されました。本研究で検証された機能的能力尺度は、ヘルシーエイジングの概念をモニタリングする役割を果たすと共に、高齢者の普遍的な幸福に向けた効果的な介入策と政策開発の促進に役立つことが期待されます。

お問合せ先: 日本福祉大学健康社会研究センター 主任研究員 福定正城
fukusada-m@n-fukushi.ac.jp

本研究で妥当性を確認した「機能的能力」尺度6因子24項目

因子	項目	本論文のデータ	開発時のデータ*
		(2019) n=139,792	(2016) n=35,093
社会的ネットワークを築き維持する能力	よく会う友人・知人との関係 (いずれかいる%)	94.0	96.0
	1か月間に会った友人・知人の数 (1人以上%)	89.9	93.4
	友人・知人と会う頻度 (年数回以上%)	90.9	76.1
社会的サポートを提供する能力	相談にのることがある (はい%)	77.9	82.3
	心配事や愚痴を聞いてあげる人 (いずれかいる%)	93.3	95.1
	友達の家を訪ねることがある (はい%)	57.7	64.1
	本や雑誌を読んでいる (はい%)	78.1	81.7
自由に移動する能力	バス・電車での外出 (できる%)	96.9	98.7
	食品・日用品の買い物 (できる%)	98.1	99.2
	介護・介助の必要性 (必要ない%)	94.9	96.6
	病人を見舞うことができる (はい%)	92.9	95.2
基本的なニーズを満たす能力	預貯金の出し入れ (できる%)	97.2	98.1
	請求書の支払い (できる%)	97.8	99.0
	書類が書ける (はい%)	94.5	96.0
	食事の用意 (できる%)	94.0	94.7
学び、成長し、意思決定する能力	趣味関係のグループ (年数回以上%)	39.1	50.9
	スポーツ関係のグループ・クラブ (年数回以上%)	30.0	41.0
	学習・教養のサークル (年数回以上%)	14.2	18.7
	健康づくり・介護予防の会 (年数回以上%)	13.7	17.8
社会へ貢献する能力	町内会・自治会 (年数回以上%)	40.6	41.2
	運営に関わっている活動グループ (年数回以上%)	40.6	41.1
	老人クラブ (年数回以上%)	12.8	21.1
	特技や経験を他者に伝える活動 (年数回以上%)	10.5	14.8
	ボランティアのグループ (年数回以上%)	20.4	28.0

* Nishio M, et al. Age and Ageing 2024;53(1):afad224.



■ 背景

WHOの提唱するヘルシーエイジングの実現に向けて、Nishio(2024)らによって機能的能力を評価する尺度が開発されています。しかし、本尺度の妥当性を確認する上では、社会環境の変化を考慮して開発時と異なるデータを用いた検討が重要となります。そこで、本研究では、新たなデータセットに基づいて、機能的能力尺度の交差妥当性を検証することを目的としました。

■ 対象と方法

2019年度に日本老年学的評価研究機構が調査したデータである266,453名のうち、機能的能力尺度の全24項目に欠損のない139,792名を分析対象としました。分析方法は、全24項目の該当割合を算出した後に、因子分析等を実施しました。該当割合と因子分析の過程においては、開発時のデータとの比較をおこないました。

■ 結果

機能的能力尺度24項目の該当割合を開発時のデータと比較したところ、24項目中18項目は5%ポイント未満の変動でした。因子分析の結果、開発時における3因子構造とは異なる6因子構造が最適と判断されました。6因子は、第1因子「社会的ネットワークを築き維持する能力」、第2因子「社会的サポートを提供する能力」、第3因子「自由に移動する能力」、第4因子「基本的なニーズを満たす能力」、第5因子「学び、成長し、意思決定をする能力」、第6因子「社会へ貢献する能力」と命名されました。モデルの適合度指標等も良好な値を示していました。

■ 結論・本研究の意義

分析の結果、機能的能力尺度の交差妥当性が支持されました。本研究が示した6因子構造は、WHOの提唱する機能的能力の5つの領域を含みつつ、高齢者の特性をより詳細に反映していることが示唆されました。本研究で検証された機能的能力尺度は、ヘルシーエイジングの概念をモニタリングする役割を果たすと共に、高齢者の普遍的な幸福に向けた効果的な介入策と政策開発の促進に役立つことが期待されます。

■ 出版論文

福定正城・西尾麻里沙・斉藤雅茂・長谷田真帆・近藤尚己(2025)「ヘルシーエイジングに向けた機能的能力尺度の交差妥当性の検討: JAGES2019横断データより」『厚生学の指標』72(7), 12-19, 厚生労働統計協会。

■ 謝辞

本研究で使用した調査データは、JSPS科研費(19K02200、20H00557、20H03954、20K02176、20K10540、20K13721、20K19534、21H00792、21H03153、21H03196、21K02001、21K1032、21K11108、21K17302、21K17308、21K17322、22H00934、22H03299、22J00662、22J0140、22K01434、22K04450、22K10564、22K11101、22K13558、22K17265、22K17364、22K17409、23K16320、23H00449、23H03117、23K1979、厚生労働科学研究費補助金(19FA1012、19FA2001、21FA1012、22FA2001、22FA1010、22FG2001)、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター長寿医療研究開発費(21-20)、国立研究開発法人科学技術振興機構(JPMJOP1831、RISTEX、JPMJRX21K6)、公益財団法人健康・体力づくり事業財団令和4年度健康運動指導研究助成、新潟大学十日町いきいきエイジング講座寄附金、TMDU重点研究領域、国立研究開発法人防災科学技術研究所などの助成を受けてJAGESIによって実施・整備されたものです。

■ 用語解説

交差妥当性: 開発された測定ツールが、異なる時期・異なる集団でも同じように正確に測定できるかを確認すること。